［発行］札幌市教育文化会館
アクト第25号

act

art,
culture,
tradition

25
March 2017

舞台空間を造形する。

Photo by Erika kusumi

舞台美術家

劇場の席に座って舞台に目をやると、これから始まる物語を予感させるセットが、静かに開演を待っている。この場でどんな物語が展開されるのだろう？ そうやってあれこれ想像しながら過ごす時間は、観劇の一つの楽しみだ。「舞台美術」と呼ばれるこれらのセットは、演出上必要な要素と、演者の動線などが考慮された造形になっている。脚本と演出家の意図を空間に具現化するために、「美」の「術」を駆使する。それが、舞台美術家。

Photo by Hiroo Takatsu [STUDIO TAKE2]

「印象に残っている仕事」として高村さんが挙げてくれたのが、2015年にコンカリーニョで再演されたELEVEN NINES presents dEBoo #1『12人の怒れる男』。中央に設置された天秤を思わせる柱の二箇所の塗装は、白ベースで黒を乗せていったものと、黒ベースに白を乗せていったもの。「裁判の過程で、白かったものが黒になること

もあれば、その逆もあります。真実というものが、まだらで白黒はっきり分かれていないことを表現しました」と高村さん。三面囲み舞台で、客席の下に舞台の角が入った設計。「固定概念にとらわれない使い方ができて、今までと違う面白さを感じました」。

ELEVEN NINES presents dEBoo #1『１２人の怒れる男』

Photo by Erika kusumi

舞台空間を造形する。

3月に札幌市教育文化会館で上演された『わが町』で舞台美術を手がけた高村由紀子さん。電動工具片手に大きなセットをテキパキと組み立てていく様子は、小柄な身体のどこからこんなエネルギーが？と驚くほど。作業場にお邪魔して、いろいろお話を聞いてきました。

［インタビュー］
INTERVIEW

舞台美術ができるまでの工程を一人で手がける高村さん。アイデアを出して、作る。ときには自宅から調達する。その面白さと苦労とは？

プランは、すごく必死に考えて一つか二つひねり出す感じです。

学生時代、映画の美術をつくる人か旅人になるか（笑）で迷っていた時期があったんです。その頃、鈴井貴之監督が札幌で撮影した映画『man-hole』で美術製作を手がけていた「裏方家」という会社で働かせてもらえることになって。それがこの世界に足を踏み入れたきっかけです。それまで電動工具なんて使ったこともなかったから、入った当初は本当に大変で。それから13年間続けてきた理由は…無我夢中でやっているうちに引き込まれていったのかな。忙しすぎて考える余裕がなかったというのが正直なところかも（笑）。裏方家の後は、舞台美術専門の「福田舞台」で4年ほど働きました。福田さんとの二人体制だったので、とにかく毎日ひたすら製作して、作る技術はかなり鍛えられたと思います。私はプラン出しから大道具や小道具の製作まで全て一人でやろうとしてしまうのですが、それはなんでも一人でやっていた福田さんの影響があるかもしれないです。

プランを出すのは毎回大変です。私、何個もアイデアが浮かぶタイプじゃなくて、すごく必死に考えて、やっと一つ二つひねり出す感じなんです。ただ、日々の中でちょっとした模様なんかを目にした時に、「これを舞台セットにできるかも」って思うことはよくあります。地面にかすれた感じで引かれた白線の形から「これがそのまま壁の形になったら面白いな」とか。思いがけないところからプランのアイデアが生まれる面白さはありますね。

木工なら基本的にどんな形でもだいたい自分で作ることができるとわかっているのですが、演出家からの要望で新しい素材を使うときは緊張します。作品によって映像素材を研究したり、時間を見つけては映画や美術作品に触れるようにしています。自宅のソファやテーブルなどを小道具として使うこともありますよ。真鍮のドアノブを家から持っていったときは、居間のドアをスズランテープで止めていて、息子に怒られました（笑）。

舞台美術は脚本と演出家ありきの仕事であって、セットを自分の「作品」と思ったことは一度もないです。最終的に自分の色が出ているかもしれませんが、そこを意識したことはないですね。開演してしまえばセットのことは意識に上らなくなるのが本当だと思うので、お客さんには開演までの間、セットを見ながらこれから始まる舞台のイメージを膨らませてもらえればと思います。作品と美術が不可分のものとして、見た人の記憶に残ってくれたら嬉しいですね。

PROFILE
高村 由紀子
Yukiko Takamura

1980年北海道札幌市生まれ・在住。2004年4月、主にCMの美術を手がける裏方家で働いたことを機に舞台美術の世界へ。2004年12月に福田舞台へ入社。福田恭一氏のもとで修行する。2006年からプランを始め、2008年に独立。以降、芝居、オペラ、バレエなどの舞台美術を手がける。現在、6歳の息子がいる3人家族。ちょっとした合間に、舞台プランにつながる造形観察をするのが日課となっている。

電動工具もトラックの運転もおてのもの。

高村流舞台美術製作の流れ 舞台美術家のお仕事、拝見。

1 プラン出し

公演の約2カ月前に演出家と打ち合わせ。脚本を読んで、演出家の希望をどう表現するか考えます。約1カ月後をめどに、アイデアを模型化して美術プランを発表。OKが出たら、道具帳（寸法図面）や配置を記した平面図を仕上げます。

2 製作

材料を発注し、製作がスタート。製作期間は、平均して10日ほど。高村さんのようにプラン作成から製作まで全て担う人と、プランだけ作成して製作は外注する人とに分かれます。小屋入り前に必ず通し稽古を見て、微調整をしていきます。

3 仕込み

パネルを立てたり、吊り物を吊ったりして舞台にセットを建てこんでいきます。基本的なスケジュールは9時から仕込んで17時くらいには終了。限られた時間の中で、素早く作業しないといけないため、神経を使う場面です。

4 舞台本番

高村さんの場合は、基本的に上演中の大道具操作は舞台監督にお願いしています。（スタッフが足りていないときは、現場につくことも。）リハーサルと本番を確認したら、楽日までお休みです。

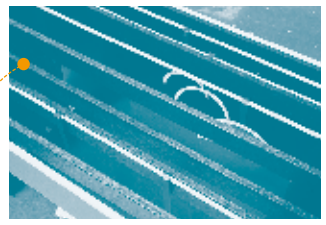
5 バラシ（撤収）

公演終了後は速やかに撤収。パネルなど再利用できるもの以外は全て廃棄します。トラックにバラしたものを積み込んで、ゴミ処理場へ捨てに行くまでが高村さんのお仕事。このときの積み込みとおろしが一番大変だそうです。

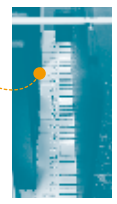
「わが町」の舞台美術、ここがポイントでした。

3月に教文で上演された『わが町』。模型の細部をズームアップ！

もともと極めて簡素な舞台装置で演じられる本作。脚本を読んで高村さんの頭に浮かんだキーワードは、「ない感」。「必要最低限なものを置くのではなく、“あるのにない”感じを出すにはどうしたらいいだろうか」と考えて出てきたプランが、限りなく単純化された家のモチーフが中空に浮いているというものでした。



モチーフのデザイン中は、車から住宅ばかり見ていたそう。舞台上部にある物を吊るための棒（バトン）も模型で製作



バトン、ライト、幕など、演出を支える舞台機構も書き込まれています。

PICK UP！

年間15本ほどの舞台美術に携わっている高村さんに、これまでの中で印象に残っているセットを選んでもらいました。

ELEVEN NINES presents dEBoo #2
『そして誰もいなくなった』
（2016年）
役者の動線をふまえながら観客の想像力をいかにかきたてる構造にするか、かなり考えました。

弦巻楽団
『君は素敵』
（2017年）
明治、大正期の室内化粧を追求。昔の意匠を追求して作るのは面白い！と改めて思いました。

札幌市教育文化会館 高校生演劇ワークショップ＋発表公演
『転校生』
（2016年）
窓に描かれる映像が素晴らしく、映像を映す時のセットの工夫や可能性も考えた作品です。

劇団千年王國
『贋作者』
（2009年）
五台の引き枠で景を表現。配置の仕方や動くスピードで多様な表現ができるよう工夫しました。

トランク機械シアター
『機械仕掛けの王国』
（2012年）
初めての子ども向け作品でいろいろ模索し、歯車をプロセニアムに。歯車が回るセットです。

yhs
『四谷美談』
（2016年）
初演時のパネルにモチーフを加えて、暖簾の染めも変えるというマイナーチェンジをしました。

演劇ユニット電気ウサギ
『水そこ花火』
（2009年）
独立後すぐの大きな仕事。紙片をコンカリーニョの舞台全面に敷き詰めて海に見立てました。

Lcアルモーニカ
『イル・カンピエッロ』
（2012年）
オペラのセットです。サイズが大きくて描くのが大変で…当時の自分の限界を出し切りました。

公演情報

高村さんが舞台美術を手がける公演をご紹介。ぜひ足を運んでみてください。

アリスインプロジェクト札幌公演 第2弾 **『みちこのみたせかい』**

［日　時］2017年5月17日（水）19:00開演、18日（木）19:00開演、19日（金）14:00/19:00開演、20日（土）13:00/18:00開演、21日（日）12:00/17:00開演
［会　場］生活支援型文化施設コンカリーニョ（札幌市西区八軒1条西1丁目）
［料　金］S席5,500円（最前列・指定席）、A席4,500円（指定席以外・自由席）
［お問い合わせ］090-2814-8575（みちこのみたせかい札幌公演担当）